

ふるさとわがまちづくり

荒井自治区

◆自治区の概要

荒井町は、矢作川と籠川の合流点の北岸に位置します。地区内で発掘された船塚遺跡と万加田遺跡は、縄文時代中期(BC3000年頃)から平安時代(西暦1000年頃)までの長期にわたって、両河川による洪水に悩まされつつも、人々が定住した遺跡です。

式内兵主神社は、西暦500年頃 大鴨積命(オカモツミコト)(大物主神の十世孫、加茂氏の開祖)が当地に暫く居住された時に、“その祖先神の大物主命とその妃神の三穂津姫命を配祀され”創建したという。(三河国西加茂郡誌)

この由来より、平安時代の延長5年(西暦927年)、全国の神さんの中から、国としてお祭りする神社を『延喜式』という法律書に登録された。(式内というのは、この延喜式に登録されたことを示す)

荒井町に面する矢作川の堤防は、安土桃山時代の慶長年代(1596~1615)頃、僅かに土砂を築きたて漸く川水の氾濫を防ぐに止まっていた。

慶長7年(1602)8月暴風雨洪水があり、領主熊谷重長氏は同年12月から8年9月にかけて、荒井・梅ヶ坪の村境から長興寺に至る矢作川の二流、東矢作川(高橋川)と西矢作川(衣川)を一つにする川床替えの大改修を行った。(挙母町史考)

延宝元年(1673)、鳥山清は矢作川の水位調節のため河道を広げ、堤を改修した。これを清元堤とも呼ばれ、洪水に苦しめられていた当時の人々に長く記憶される。

また、矢作川の堤防に桑樹を植栽し、この地方の養蚕飼育の基礎をつくったともいわれている。(猿投村史)

当区は、この頃から昭和40年頃まで国道153号線と矢作川堤防の間は桑畑でした。信光寺は養蚕業が盛んな頃、繭(まゆ)の引き渡し場所として長年共同使用されていたといわれています。荒井町の中央を国道153号線が通り、籠川に荒井橋、矢作川に平成記念橋が架かり、交通条件に恵まれています。



それゆえ、昭和40年(1965)代になり良好な住宅地として急激な発展をし、人口・世帯数の増加で、自然環境が大きく変わってきました。

そこで、まちづくり活動は 従来からの住民と新しく全国・海外から移住された人との“ふれあい”をモットーに進めています。

◆荒井の由来

次の、二つの説があります。

- ① 往古に“荒い堰”があったことによるという(豊田市史)。(7世紀前半頃)
- ② 荒井ハ、元新居ト書キタルモノニシテ始メ梅坪ヨリ分離シタルモノ。新ニ此ノ地ニ居ヲ占メタルニヨリテ起ル。然ルニ何時ノ頃ニカ、荒井ト改メタルモノナリト(猿投村史)。(7世紀末頃)

◆まちづくり活動

自治区内には、次のような組織・団体があり、それぞれが区民の参加を得て、“安全・安心、環境、少子・高齢化、コミュニケーション・ふれあい”の分野で、各種行事・活動をしています。

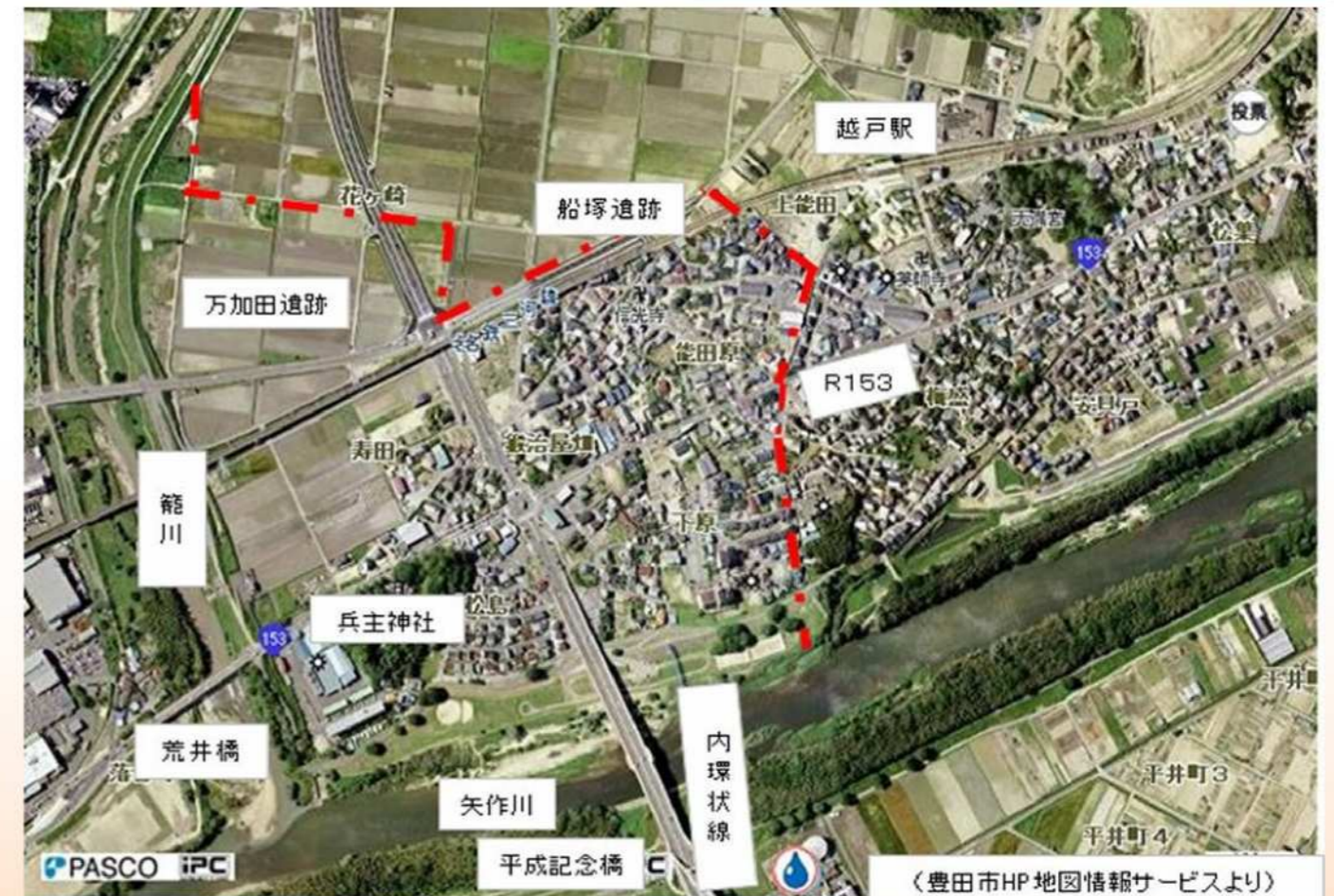
- ① 自治区スポーツ部会
- ② 自治区福祉文化部会
- ③ 自治区青少年育成部会
- ④ 自治区環境施設部会
- ⑤ まちづくり協議会
- ⑥ 防犯活動隊
- ⑦ お花し隊
- ⑧ 草刈り楽しみ隊
- ⑨ 年行事
- ⑩ 厄年会



昭和26年 戸数:約30戸 (約230人)
 ・R153と矢作川との間に、民家が無い。
 ・兵主神社の杜は樹木がよく繁る。
 ・『山の神』の樹木が見える。



昭和46年 戸数:約170戸 (約1000人)
 ・R153と矢作川の間、住宅が増加。
 ・伊勢湾台風で神社の樹が倒れ、馬場が現れる。
 ・水田は土地改良で、碁盤の目。



◆今後の課題

お金さえあれば地域社会の世話にならず一人でも生きていける社会となり、個人は他人の干渉をきらう個人主義の行動様式となり、趣味等で自己実現に力を入れている。

新しい住民の増加、核家族化、都市化が今後も進行するので、まちづくりの活動と自己実現の行動が両立する活動の“企画と運営”の推進です。

荒井自治区データ (H20.4 現在)

世帯数: 512世帯
 : 239世帯 (昭和51年)
 組数: 31組
 面積: 0.47Km²
 自治区たより: 「あらいだより」年4回発行
 回覧: 月2回
 ちびっ子広場: 2箇所 ふれあい広場: 1箇所
 防犯灯設置箇所: 63箇所
 小学校: 青木小学校区
 自治区会館: 荒井町児童館 (TEL45-4123)